

自然遊学館 だより

2013 SUMMER

No.68



二色浜で打ち上がったシゲトウボロ

自然遊学館が創立してまもない頃に児嶋 格さんが記録したフジツガイ科の巻き貝。当館は今年の10月で20周年を迎えます。8月から10月にかけて、貝塚市の海辺にすむ生きものたちを紹介する特別展「貝塚市の海辺の生きもの」を開催しています。ぜひご来館ください。

2013. 8. 9 発行 貝塚市立自然遊学館

目 次

*ネイチャーレポート

- クモは好きですか?岩崎拓... 1
 釣り具店で見つかったトミヨ.....山田浩二...4
 *行事レポート
 平成 25 年度 切り絵製作会 I川村甚吉... 5
 春の和泉葛城山登山 2013岩崎拓... 7
 渚の生きもの山田浩二... 9
 自然を食す I川村甚吉... 11
 二色浜稚魚放流鈴木勝也... 14
 親子釣り体験岡田真太郎... 15

*泉州生きもの情報

- ヒラテテナガエビ山田浩二... 16

*館長コーナー

- 生きものだいすき.....高橋寛幸... 17

*特別展レポート

- 第 8 回生き物切り絵展報告川村甚吉... 19
 特別展「千石荘の自然」の報告 I
岩崎拓・湯浅幸子... 21

*寄贈標本 24

*スタッフ日誌 28

*お知らせ 29

ネイチャーレポート

クモは好きですか？

2011年度の活動報告書「貝塚の自然第15号」で、1993年の創館以来2011年度末までに採集された貝塚市のクモ類標本のデータを整理し、16科77種のリストを提出しました（岩崎・白木、2013）。昆虫標本の整理だけで手一杯の状態、クモ類標本までなかなか手が回らず、まとまったリストの提出としては自然遊学館で初めてのものです。2012年度末では80種に増えている、まだ種数は増えると思います。手が回らずと書きましたが、回らなかった理由は時間が足りないだけではありませんでした。

虫が苦手だという人に、「虫は好きだがクモはきれい」と言う理解してもらえないかもしれません。「そんなもん、どちらも同じだろう」と。でも、クモはきれいだという虫好きは、けっこう多いのです。博物館に勤める者だけが博物学に責任を負っているわけではないですが、それでもある程度の役割を果たす義務はあります。ここでは、例えばカマキリだけが好きですというような偏愛ではなく、なるべく多くの生きものに対して博愛を示す必要があるかもしれません。

でも残念ながら自分は、クモが苦手なのです。獲物を糸でグルグル巻きにして体液を吸うという捕食の方法を嫌いなわけではありません。それはむしろ上手くやるなと感心するぐらいです（図1）。幾何学的にとっても美しい網をつくるグループもいます。わずかにいる毒グモが特に嫌だという

わけでもありません。虫の世界にもオオズメバチという危険な奴もいるのです。



図1. ヤモリを捕まえたセアカゴケグモ

クモの風変りな特徴として、オスが精子を腹部下面の生殖器からいったん頭部近くの触肢の先に移してからメスの交尾器に挿入するという行動があります。触肢という器官は顕微鏡で見ると、なかなか複雑な形をしていて、種を見分けるポイントになります（図2）。この間接受精という交尾方法も、昆虫の世界ではトンボ目で知られています。



図2. メガネヤチグモの触肢

そういったことではなく、以下では、自分がクモを苦手な理由を、クモの特徴を示

しながら考察してみたいと思います。

理由 1. 体が柔らかい

自分はガの幼虫も苦手です。それは体が柔らかいからだと思います。愛着を持つためには、掴んで遊べる適度な硬さが必要なのでしょう。固い虫の仲間であるカブトムシやクワガタムシは、子どもたちに大人気です。カミキリムシが好きという人もけっこういます。バッタの仲間はコウチュウに比べて少し柔らかいためか、人気という点では劣ります (図 3)。



図 3. ツチイナゴ幼虫

そういう意味では、柔らかい腹部をカバーする翅の役割も大きいですね。もっとも、クモの立場に立てば、体毛がほとんどなくなった変な哺乳類に、そんなこと言われたくないといったところかもしれません。

理由 2. 脚が 2 本多い

昆虫は 6 本脚、クモは 8 本脚です。たった 2 本の差ですが、微妙に「違う」と思わせませす。ここで重要な点は「長い脚で本数が多い」ということです。脚が短いダンゴムシやワラジムシ、あるいはムカデさえ、

形的にはそれほど嫌いではないのに、長い脚が 15 対もあるゲジは、気絶ものです (図 4)。あのサワサワと波打って動く多くの脚は、とてもこの世のものとは思えません。クモに近縁なザトウムシに対しても全く感情移入できません。別世界のものという感じ です。



図 4. ゲジ

この柔らかい体と長い脚という 2 つの理由によって、自分がクモを苦手なことの大半は説明できると思います。例えばエビとカニの仲間は十脚類と呼ばれ、脚が 10 本もありますが、その仲間のアメリカザリガニは子どもたちに大人気です (図 5)。それは硬くて掴んで遊べるからだだと思います。理由 1 と理由 2 がそれぞれ単独ではクモを嫌う理由にならなくても、合わさると大きな作用を発揮するのでしょうか。



図5. アメリカザリガニ

以下の3つの補足的な理由を考察してみたいと思います。

理由3. 動きが予測できない

クモは、いったん動き出すと、意外にすばやく動きます。しかも動きを止めません。バッタなどは跳ねる前に後脚をふんばる動作が入りますし、コウチュウも飛ぶ前にはふんばって前翅を開くので、ある程度次の動作が予測できます。でもクモの動きはメリハリがないのです（単に自分が見慣れていないせいかもしれません）。同じ8本脚のザトウムシは動きがゆっくりな分、まだクモよりは許せます。結局、クモの動きに感情移入できないことが大きいのだと思います。それは昆虫の中でも動きが速いゴキブリにも言えます。動き出しと止まる時が予測できないのです。

理由4. 眼の数が多い

昆虫も基本は、複眼2個と単眼3個を合わせて合計5個の眼を持つことになりませんが、単眼は小さく（あるいは退化して）、ほとんど目立たなくなっているのので、自分たちヒトと同じく、2個の眼を持つように

「見えます」。それに対して、クモは8個の単眼の大きさにあまり差がありません。これを顕微鏡で見ると、8個の眼で睨み返されているように感じます（図6）。でも、眼が多いという理由は、いったん嫌いになった相手の荒さがしをして、さらに嫌いな点を見つけたというものかもしれません。

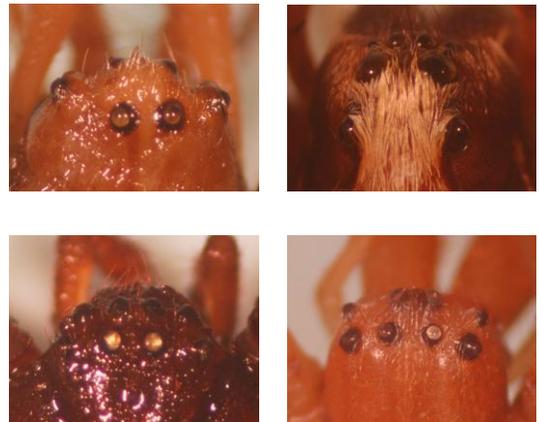


図6. クモの眼

- (左上) ナガコガネグモ
- (右上) ハラクロコモリグモ
- (左下) セアカゴケグモ
- (右下) ヒカリアシナガグモ

5. 糸

雑木林の中や林縁で調査していると、不意に顔にクモの網がかかることがあります。窓に古くなったクモの巣が残っているのも、何となくイヤなものです。何か不吉な予感がします。でも、クモ本体の苦手さ加減に比べれば、この特徴は些細なものです。後付けの理由だと思います。ただ、天井から糸をツーと伸ばして降りてくるクモが首筋に降りるというシーンは、クモ本体を伴っている分、想像するだけでぞぞっときます。

博物学を標榜する人間としては、問題あ

りの文章かもしれません。クモの良い点を探す努力が必要ですね。クモが苦手になるということは、クモにとっては大型動物に気持ち悪がらせて捕食を避けるということなのかもしれません（本当かな?）。以上のことから導かれる仮説は、クモの方が虫よりも「旨い」のではないかということです。

昆虫が他の陸生の節足動物（例えば、クモ、ムカデ、ヤスデ、ダンゴムシ、ワラジムシ、ダニなど）に比べて繁栄している要因は、植物を摂食する植食者の専門化と適応放散が大きいと思います（寄主-寄生者系の専門分化もあります）。それは食われる側の植物の対抗策と連動して、特定の植物に適応することにより種分化が繰り返されてきた結果です。パッチ状に分布する餌植物に対しては翅による移動がより有効だったのでしょう。その相乗効果の結果、適応放散が加速したのだと考えられます。昆虫の世界が捕食者だけだったら、このような適応放散は生じていなかったでしょう。でも、先のクモと昆虫の比較で、クモよりも昆虫が繁栄していることを見ると、虫たち、特に植物を食べる虫たちのあまり緊張感のない態度が気になり出し、虫たち自身がその不味さに自信を持っているからではないかと思ったりします。

引用文献

岩崎 拓・白木江都子 (2013) 自然遊学館所蔵貝塚産クモ目標本 (2011年度採集分まで). 貝塚の自然第 15号: 135-141.

(岩崎 拓)

釣り具店で見つかったトミヨ

2013年6月30日、釣り好きの小学生、千地芳樹さんが市内の釣り具店で釣りの生き餌として購入したエビ（通称シラサエビ）の中に変わった魚を見つけたとのことで、持参してくれました。全長5cm程の細い体に、受け口、そして時おり、トゲのように背びれを立てる姿は、なんと、トゲウオ科のトミヨ属 *Pungitius* でした。

日本産魚類検索の図鑑で見える限りは、トミヨ属淡水型にあたるのではと思いますが、国産種とも限りません。釣り餌用生きエビは中国等の国外から輸入されるケースも多く、このエビに外来魚が混入している事例が報告されています（平嶋、2006など）。国内でのトミヨ属淡水型は太平洋側では岩手県以北、日本海側では福井県以北の本州、北海道に分布し（細谷、2013）、環境省のレッドリストでは“本州のトミヨ属淡水型”は「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定されています。



貝塚市内の釣り具店で見つかったトミヨ

いずれにしても、本来の生息地から遠く離れた場所でトミヨが見つかったということから、もともと生息していなかった場所に、故意ではなくても、人為的にさまざまな生きものたちが生きてきたまま運ばれてきてしまう現状が垣間見えます。また、

同じトゲウオ科に属し、環境省のレッドリストで絶滅危惧ⅠA類に位置づけられるハリヨが、岸和田市の津田川上流で2010年に採集されました。これは観賞魚としての流通に伴い、国内に生息する希少淡水魚が本来の生息地を超えて人為的に移植放流されていることが考えられ（花崎ほか、2011）、国内外来種問題として懸念されます。

なお、今回見つかったトミヨは8月7日現在、展示水槽で飼育しています。アカムシ（ユスリカの幼虫）を入れると、すごい食欲でおなかが膨れるまで食べて元気に泳いでいます。寿命は1年半ぐらいなようですので、死んでしまったら標本として保管し、機会があれば遺伝的な解析をして、どこからやってきたのかを調べられたらと思います。

謝辞

今回のトミヨについて情報をいただいた和歌山県立自然博物館の平嶋健太郎氏、滋賀県立琵琶湖博物館の金尾滋史氏にお礼申し上げます。

引用文献

- 平嶋健太郎（2006）釣り餌用生きエビに混入する外来魚．南紀生物，48（1）：1-5.
- 細谷和海（2013）トゲウオ科，in 中坊徹次編、日本産魚類検索－全種の同定、第三版、606-607．東海大学出版会．
- 花崎勝司・三宅壽一・金尾滋史・小北智之（2011）津田川上流域（大阪府岸和田市）で採集されたハリヨ．きしわだ自然資料館研究報告，No.3：5-11.

（山田 浩二）

行事レポート

平成 25 年度 切り絵製作会 I

日時：2013年4月14日（日）13：30～15：50

場所：自然遊学館多目的室

目的 自然物をしっかり観察し、切り絵で表現する。

今回の教材は「とり」とした。

参加者 受講生 15 人＋スタッフ 3 人

教材 羽、ウグイス、ヒヨドリ 2、カラヒワ、アジサシ、カキとメジロ、ツル、オオマシコ

活動の様子

館長挨拶からスタートです。館長から「集中し過ぎて疲れることのないように」と参加者の体を慮って挨拶して頂きました。

今回の製作は「とり」がテーマです。若干「愛鳥週間」を意識しました。選んだ教材はアジサシ4人、ツル5人、カキとメジロは2人、ヒヨドリⅠ、ヒヨドリⅡ、ウグイスは各1人でした。



出来上がりの切り絵

アジサシは群れで飛んでいる様子です。それぞれが同じ方向を目指してはいるのですが、ある国の軍隊のように統制されて飛んでいません。それぞれ自由にしかも群れを意識して基本的な規律を守りながら飛んでいる様子を表現しました。確か春の季節に近木川河口・二色の浜海岸で見たものを材題にしました。

ツルは正月などのお祝い用にデザインしました。当地はタンチョウツルは飛来しませんが、ナベヅルは一昨年約5ヶ月間3匹滞在していました。そのツルはまだ切り絵にしていません。間もなく製作する予定です。

羽はムクドリのものですが、何しろ細かいのでB4サイズに拡大して製作しました。それではベテランでなければとても切ることはできませんので、約3分の1に模様を減らして教材化しました。

カキとメジロはカキの実をついばみながらせわしく動き回るメジロに焦点を当てて作りました。各メジロの表情を見てください。

ヒヨドリⅠとⅡは市民の森で見かけたものを材題にしました。冬にヤマモモの枝にみかんをくっつけておきましたらすぐに見つけて食べに来ました。そこを通るたびに飛んでいきましたが、何回か繰り返しますと、飛ぶのが面倒になったのでしょうか、頭の部分をヤマモモの幹にかくして、「私はいないよ。るすだよ。」という感じのしぐさでした。そんなことも含めて切り絵に向かいました。

ウグイスは冬のもので、1月の極寒に山に行きますと、地面すれすれに飛んだり

歩いたりしています。その頃はとても人懐っこくなります。息を凝らして時間をかけて観察していますと、ほんのまじかにまで寄ってきます。そのウグイスを切り絵に閉じ込めました。

それぞれのそうした製作の思いを伝える時間がないのは残念でしたが、受講生は私の思いを察してか一点も大切に切っていました。



製作風景 1



製作風景 2



製作風景 3

作品が出来るまでを簡単に復習しますと、教材用のコピーにケント紙を弱い接着力のスプレーで貼り付け白か黒の部分(教材によって違う)をカッターナイフで切っていきます。カラーの場合はその大きさに合った色ケントを裏から強いスプレーのりで貼り付け、最後に台紙に着けて完成です。ケント紙をカッターナイフ(アトナイフ)で切るのにちょっと力と技術が必要です。



教材の見本とスプレーのりで貼り付ける場所などの様子

(川村 甚吉)

春の和泉葛城山登山 2013

日時：4月27日(土) 10:00~16:00

場所：蕎原~和泉葛城山山頂

参加者：31人

落葉樹が多い山頂の冬は、北の地方から飛来してきたオオマシコ、ウソ、カヤクグリといった冬鳥たちの観察に適しています。樹々に葉がなく、鳥の姿を見つけやすいからです。3月までは何とか冬鳥の観察ができます。ただし1月は、積雪のため登山が困難な時もあります。

4月になると、ブナをはじめとする落葉樹の芽吹きが目立ち、新緑自体を楽しむ時期になります。葉が茂りだす分、鳥たちの姿は少し見えにくくなります。山頂で行事をする際の目的は、2~3月は鳥、4~5月は新緑、6月以降は昆虫といったところでしょうか。ただし、昆虫の季節になると、ウシアブやヤブカなどがまとわりつき、さらには重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の感染で話題になっているマダニの活動も盛んになります。

今回、4月末に登山を企画した目的は、山頂のブナ林の新緑を見てもらうことです(図1)。



図1. 和泉葛城山山頂のブナ

当日は、天候に恵まれました。日影では涼しく、日向では少し暑い程度で、全体の行程では大汗もかくこともなく、寒すぎることもないという登山日和となりました。

登りは登山道 B コース（標高 220m～858m）を進み、途中、沢の中間点、合流点（塔原コース、箱谷コースと合流）、枇杷平、みどりの百選、ブナ林デッキの 5ヶ所で、スタッフの湯浅さんによる植物の解説を聞きながら休憩し、約 2 時間半で山頂にたどり着きました（図 2）。



図 2. 合流点での休憩の様子

湯浅さんが説明した植物は、スタートから山頂まで順番に並べると、アベマキ、ウバメガシ、タチツボスミレ、ニオイタチツボスミレ、シハイスミレ（図 3）、シヨウジョウバカマ、コバノミツバツツジ、トサノミツバツツジ（図 4）、ミヤマシキミ、コハウチワカエデ、イタヤカエデ、ブナなどです。姿形は似ているのに、細かな形質が違って、見分けるのに苦労するものがあることが厄介です。



図 3. シハイスミレ

葉の表側に斑が入り、葉の裏側が紫色がかっている点で、タチツボスミレやニオイタチツボスミレと見分けることができます。



図 4. トサノミツバツツジ（上）

4 月 19 日の下見の際、同行していただいた上久保文貴先生に、花や葉の形と色が似ているコバノミツバツツジとの見分け方を教えてもらいました。子房が短毛に覆われているのがトサノミツバツツジで（下左図）、コバノミツバツツジの子房は長毛に覆われ綿毛のようになっています（下右図）。

子どもたちは、小学校高学年になると、余裕で山頂まで登り切ります。まだまだ元気が残っています。B コースだけでは

物足りないらしく、より高い場所を目指す子もいました（図5）。低学年や園児では登りの最後あたりで少ししんどいと言いつ出す子もいます。これは去年も同じでした。でも、登り切って自信がつくのでしょう（今回は、高橋館長が先回りして山頂に止めていた緊急用車両を利用する方もいませんでした）。山頂は和歌山県との境で、「歩いて和歌山県に来た」というおまけ(?)も付きます。それで帰りは皆、元気いっぱい、意気揚々という感じになります。



図5. より高所をめざす

最後の箱谷コースのきつい階段も、スタッフの心配をよそに、無事に降り切りました。子どもたちの健闘をたたえて、万歳をしてから解散しました。

次回は11月16日（土）に登山の行事を予定しています。暑い昆虫の季節から、ブナ林の紅葉の時期を経て、再び冬鳥の季節へと移り変わる。その紅葉の時期を狙って登りたいと思います。秋にはキノコも見られるかもしれません。紅葉が美しい時期は意外に短く、しかも毎年微妙に変わるため、時期をはずすかもしれません。が、ゆっくりと登りながら、蕎原の

麓から徐々に変化していく景観を楽しんでみませんか。

4月27日に確認された動植物

（記録：湯浅幸子・西澤真樹子・山田浩二）

植物リスト（上記以外）

アリアケスミレ、ウリハダカエデ、カスミザクラ、クサイチゴ、サルトリイバラ、スギ、チゴユリ、ナガバモミジイチゴ、ヒカゲノカズラ、ヒノキ、フユイチゴ、ミヤマウグイスカグラ、ミヤマナルコユリ、ムロウマムシグサ、ヤマザクラ

鳥リスト

アオバト（羽根）、アカゲラ属かアオゲラ、ウグイス、カケス、カワラヒワ、コゲラ、シジュウカラ、センダイムシクイ、ツツドリ、ツバメ、ヒガラ、ヒヨドリ、メジロ、ヤマガラ

昆虫リスト

カワゲラ sp.（同定：森本静子さん）、クロヤマアリ、ピロードツリアブ、ムネアカオオアリ

（岩崎 拓）

渚の生きもの

日時：2013年5月25日（土）13:00～15:30

場所：近木川河口

参加者：55人

協力：大阪湾環境保全協議会

今年度初めて海辺で行う自然観察会でした。例年、まだこの時期は海辺では肌寒さを感じますが、今年はずでに初夏を感じさせる暑さが続いていたので、足を海につ

けての採集は心地よいものでした。講師に大阪府環境農林水産総合研究所の魚がご専門の日下部敬之さんと、本館の客員講師で貝がご専門の児嶋 格さんにお越しいただき、参加者ととも近木川河口にすむ生物を調べました。なお、この行事は第6回大阪湾生きもの一斉調査を兼ねて行いました。

前半は自由採集です。参加者の皆さんに近木川河口一帯に散らばってもらい、タモ網で魚類採集を行ったり、礫の下に隠れているカニ、ヤドカリや、テトラポッドに張り付いた貝などを採集しました。



近木川河口で採集



たくさん捕れたモクズガニ

近木川河口で観察した海岸動物 2013年5月25日

グループ	和名
刺胞動物門	花虫綱 イソギンチャク目 タテジマイソギンチャク
	旗口クラゲ目 ミズクラゲ
軟体動物門	ウスヒザラガイ科 ウスヒザラガイ
	クサズリガイ科 ヒザラガイ
	ケハダヒザラガイ科 ケハダヒザラガイ
	ヒメケハダヒザラガイ
	ツタノハガイ科 マツバガイ
	サザエ科 スガイ
	ニシキウズガイ科 インダタミガイ
	コシダカガンガラ
	アマオブネガイ科 イシマキガイ
	タマキビガイ科 アラレタマキビ
	タマキビ
	マルウズラタマキビ
	コビトウラウズガイ
	カリバガサガイ科 シマメノウフネガイ
	アツキガイ科 イボニシ
	フトコロガイ科 ムギガイ
	ムシロガイ科 アラムシロ
	トウガタガイ科 イトコクチキレ
	ヨコスジギリ
	クサズリクチキレ
	オーロラクチキレ
	ミサカエクチキレ
	有肺垂鰓 カラマツガイ
二枚貝綱	イガイ科 クログチ
	ムラサキイガイ
	ホトギスガイ
	コウロエンカワヒバリガイ
	イシマテ
	ナミマガシワガイ科 ナミマガシワ
	イタボガキ科 マガキ
	フナガタガイ科 ウネナシトマヤガイ
	イワホリガイ科 セミアサリ
	マルスダレガイ科 カガミガイ
	アサリ
環形動物門	カンザシゴカイ科 ヤッコカンザシ
	エソカサネカンザシ
	ナデシコカンザシ
	ミズヒキゴカイ科 ミズヒキゴカイ
	イソムシ科 イワムシ
節足動物門	フジツボ科 シロスジフジツボ
	タテジマフジツボ
	ミウガガイ科 カメノテ
軟甲綱	ヒゲナガヨコエビ科 モズミヨコエビ
	キタヨコエビ科 ボシエットゲオヨコエビ
	ドロクダムシ科 ウエノドロクダムシ
	ワレカラ科 カマテワレカラ
	ワレカラ類
	フナムシ科 フナムシ
	ホンヤドカリ科 ユビナガホンヤドカリ
	テナガエビ科 ユビナガスジエビ
	スジエビモドキ
	モクズガニ科 モクズガニ
	ケフサイソガニ
	タカノケフサイソガニ
	ヒライソガニ
	ケアシヒライソガニ(仮称)
棘皮動物門	ヒトデ綱 イトマキヒトデ科 イトマキヒトデ
脊索動物門	硬骨魚綱 ボラ類
	フサカサゴ科 メバル
	アイナメ科 クジメ
	カジカ科 アナハゼ
	ウミタナゴ科 ウミタナゴ
	メジナ科 メジナ
	イソギンボ科 イソギンボ
	イダテンギンボ
	ハゼ科 ヒメハゼ
	ミズハゼ
	チヂブ
	フグ科 クサフグ
爬虫綱	スマガメ科 ミシシッピアカミミガメ

後半は地曳網を行いました。幅 15mの網を 50m ほど沖出ししてから、高橋館長の掛け声の下、みんなで息を合わせてロープをひいていきました。ここ数年、この時期の地曳網は不漁が続いていましたが、今回はまずまずの量が捕れました。クサフグがあっとうてきに多数を占めたものの、魚類 7 種が 2 回の網入れで採集できました。

今回の観察会を通して確認した海岸動物のリストを左に記します。記録（写真も含め）を取って頂いたサポートスタッフの鈴木佐幸さんにお礼申し上げます。



近木川河口での地曳網

近木川河口地曳網（2回の網入れ）平成25年5月25日

	種名	個体数
魚類	クサフグ	52
	ボラ類	6
	アナハゼ	2
	メジナ	2
	メバル	1
	ウミタナゴ	1
	クジメ	1
甲殻類	ユビナガスジエビ	2

(山田 浩二)

自然を食す I

日時：2013年5月26日（日）12:00～14:30

場所：自然遊学館多目的室

目的 初夏の自然の恵みを食し、自然に親しむと共に、初夏の自然について学び取る

参加 21人＋スタッフ4人

講師 栗山 昭先生

メニュー

山菜ごはん（ワラビ、タケノコ）

キノコ汁（天然乾燥シイタケ）

おかず 山ウドのキンピラ

キャラブキ

イタドリの胡麻和え

天ぷら（山ウド、フキの葉、セリ、イワシ）

デザート トコロテン（クロミツ）

飲み物 クマザサ茶

学習の中身と様子

今回も自然を食すに当たり基本的な作業として、「あく抜き」が欠かせません。ワラビ、タケノコ、フキ、イタドリ、山ウドはあくを抜かねばなりません。ワラビは重曹などのアルカリで湯がきます。タケノコは米ぬかなどと一緒に湯がきます。イタドリやフキは湯につけて晒すことがポイントです。

また、海の食材のトコロテンは「テングサ」という海藻から作ります。きれいな海岸の岩礁に自生します。それを揉み洗いし、乾燥させます。冬場でしたら 3, 40 回その作業を繰り返します。初めはこげ茶色の房状でしたが薄い黄色に変色します。海の香りが苦手な人はその洗いの期間を長くしますとかなり匂いは無くなります。

市販されていますシイタケはクヌギなどの原木にシイタケ菌を打ちこんで1.5年伏せこんで作ります。おがくずに直接菌を入れ込んでちょうどお酒を造る麴のようにして栽培する2つの方法がありますが、元は自然の発生に学んだ事でしょう。天然のシイタケ菌はクヌギなどの倒木に寄生して発生しますがそのことを経験的に学び、現在の栽培法が確立されたのでしょう。今回は全く天然のシイタケ（乾燥）を使います。

調理施設の関係で実習的な機能に欠けることから、すでに作った料理を出すことも多くあります。今回は、山ウドのキンピラ、キャラブキ、イタドリの胡麻和えがそれに当たります。

もちろん山菜炊き込みご飯や、キノコ汁、天ぷら等も用意していますが、それらは早朝より栗山先生がきてくれて作ってくれた料理です。



当日のメニュー



食事風景

簡単な挨拶だけでいきなり食事から始まります。このパターンは初回から恒例パターンになりました。



説明される栗山先生

今年は柿の葉茶が出来ませんでした。猛烈な害虫による柿の葉の食害で材料の葉がありません。そこで以前からの研究していましたクマザサのお茶に切り替えました。栗山先生はその辺の事情の説明からクマザサの製法、健康への効果などを見事に説明されておられました。

それではトコロテン作りの実習です。栗山先生の説明に従って手際よく進みました。まずは材料のテングサです。



テングサ



実習風景

実習後粗熱が取れるまで川村が本日の食材、それにまつわるよもやま話をし、時間いっぱいまでの活動となりました。



実物で食材の説明をする

「自然を食すⅠ」アンケート

- ・ おみそしるおいしかった。テングサは海のものに
おいがすごかった。
- ・ ヤマブキの葉・山ウドのキンピラがおいしかった
です。ヤマブキの葉はとてもサクサクしておい
しかったです。キンピラはちょいからで、歯ご
たえもあっておいしかったです。
- ・ ワラビご飯としいたけのおみそしると魚のテ
ンピラがおいしかったです。
- ・ 今年もありがとうございます。おいしくい
ただきました。満足です。満腹です。特に天
ぷらのセリと山ウドがおいしかったです。色
々な食材集めありがとうございます。い
つも、春ばかりの参加ですので、他の季節も
一度行かせてもらいたいです。(渡辺久和)
- ・ 最初に食事から始まって、お腹のすいている
ときに、すごうれしかったです。あまり目
にしない食材をおいしく頂きました。実物の
セリやウドも実際に見せて頂き、こういうも
のなんだという認識もできました。年に3回
くらいこういう事業があるということでした
が、初めて知り、参加させて頂きました。知
らないことがわかってためになりました。ま
た、機会があれば、参加したいと思います。
どうもありがとうございました。
- ・ 自然食品を食させて頂いて感動しました。
ご飯もだしを使用しないのにとってもおいしく
頂きました。これが自然の力なのかと思いま
しました。ウドは初めて味あわせて頂きました。
お茶もさっぱりとおいしく健康にとってもよい
食材ばかりで、今日のひとときが幸せでした。
- ・ 山ウドのキンピラ、イワシ、イタドリの胡麻
和えがおいしかったです。みそ汁とご飯もお
いしかったです。ご馳走様でした。
- ・ これで3回目ですがとてもおいしいです。質

間ですが、今日食べた「ウド」はウドの大木のウドですか。(その通りです)

- 今日頂いた自然のお料理はどれも本当においしかったです。私は天ぷらがとてもおいしくて家でもやってみたいと思いました。子どもは野菜が嫌いなので困っているのですが、今日のお料理はおかわりまでしていたのでびっくりしました。寒天を食べるのも作るのも初めてのことで楽しく、めったにない体験をさせて頂いてありがたく思いました。私自身、寒天のテングサの状態を見るのは初めてだったし、40回も洗うということも知らなかったので、川村先生のお気遣いもうれしく今日参加させて頂き、とてもよかったです。本当にありがとうございます。また、来させて頂きたいと思いました。
- 今日はありがとうございます。家で寒天を作る時は粉寒天を使用するので寒天づくりの大変さに驚きました。天ぷら、ごはん、みそ汁どれをとっても素材のおいしさが引き立っていました。
- 山の食材は食べるのがほとんど初めてでした。イタドリの胡麻和えはおいしかったです。クマザサもおいしく飲みました。
- 今日は貴重な食材を使っておいしいお料理を作っていただきありがとうございます。食後に川村先生のお話を伺い、今日の食材がいかにめずらしいものかわかり、もっとゆっくり味わったらよかったなあと思いました。とてもおいしくまた、楽しい講座でした。参加させて頂き本当にありがとうございます。(葎川香織)
- 今日は本当にたくさんの山菜を苦勞して揃えて頂いたということでありがとうございました。テングサも40回も洗ってトコロテンが出

来るなんて驚きです。山菜どれもおいしかったです。

- セリ、キャラブキおいしかったです。また、来たいです。ごちそうさまでした。
- 調味料ではなく素材の味がしっかりと引き出されているお料理とてもおいしくいただきました。子どもたちに伝えていきたい味だと思います。それから山菜についての話も楽しくためになりました。素材の調達、大変だったと思います。ありがたいと思ひました。こんな気持ちで食事することを子どもたちにも分かってほしいと思います。
- セリのはがおいしかったです。ウドもおいしかったです。イワシもおいしかったです。
- 山ウドの天ぷらおいしかったです。セリのテンプラもおいしかったです。ありがとうございます。

(川村 甚吉)

二色浜稚魚放流

日時：2013年6月15日(土) 14:00~15:00

場所：二色の浜

参加者：74人

協力：大阪府海域美化安全協会

行事の開始前に本格的な雨が降りだしましたが、多くの方に参加していただきました。初めに雨の中、浜辺に落ちているゴミを拾っていただき、多くのゴミを集めることができました。

今回放流するヒラメを提供して下さった大阪府環境農林水産総合研究所栽培漁業センターから森政次さんと鈴子達也さんにお越しいたいただき、大阪湾の栽培漁業

の現状などをお聞きしました。ヒラメの稚魚は、1月の終わりに卵を入れて、約130日で12cmくらいのヒラメに成長するそうです。年間約10万枚栽培し、ほかにもオニオコゼなど様々な生き物を栽培されているそうです。

今回、ヒラメを1000枚持ってきていただき、水槽に入れられたヒラメを見て、子どもたちは興奮していました。持参したバケツに数枚ずつヒラメを入れると、雨の降っている中、岸边まで行き、次々に放流しました。



図1. 水槽のヒラメをすくって



図2. ヒラメを浜から放流

(鈴子 勝也)

親子釣り体験

日時:2013年6月29日(土)10:00~12:00

場所:近木川河口左岸導流堤

参加者:25人

後援:フィッシングショップTポート貝塚店

朝から天気が良く、猛暑が懸念されましたが、適度に風があり比較的、快適に行事を行うことが出来ました。親子釣り体験は、自然遊学館で初めて行う魚釣りの行事ですが、たくさんの方々より参加申込を頂きました。

釣りには様々な釣り方があります。その中で今回は、比較的小手軽なちょい投げ釣りで、シロギスやマハゼなどを狙いました。

まず、突堤へ入る前に二色の浜で仕掛けを準備し、注意事項、投げ方の説明、スタッフ紹介をした後、全員、救命胴衣を着用し突堤へ向かいました。



図1. ライフジャケットを着て準備OK

グネグネ動く生きた青イソメ、赤イソメを針に付けるのに悪戦苦闘される方や、釣り糸が纏れている方も居られましたが、時間が経つに連れ、きれいに投げることが出来るようになり、初めて釣りをされている様には思わないほどでした。



図2. のんびり(?)釣り体験

楽しい時間はあっという間に過ぎ、時間を少し延長し、皆様が頑張って下さったおかげで、本命のシロギスやマハゼ、クサフグ、そして終了間際にはコモンフグを釣り上げることが出来ました。



図3. 釣果

釣り場の清掃をし再び二色の浜へ戻り、全員で片付けをして、本日の獲物の説明をしました。魚釣りに魅了されたのか、行事終了後も、突堤へ残って釣りをされる方も数家族居られました。

自然遊学館での初めての魚釣り行事が無事に終了できたのも、エサを提供して頂いたTポート貝塚店、ライフジャケットを貸していただいた二色の浜公園管理事務

所、および下見も含めて行事全般でご協力いただいた食野俊男さんのご協力があったお陰です。ありがとうございました。

(岡田 真太郎)

泉州生きもの情報

ヒラテテナガエビ

本誌の前号で、貝塚市の人工島にある中部水みらいセンターの水路にオオヒライソガニが見つかったことを紹介しましたが、今回はその同じ水路で見つかったヒラテテナガエビ *Macrobrachium japonicum* を紹介します。本種はこれまで市内の河川では確認されていなかった種です。同じテナガエビ科の仲間はこれまで市内で4種が確認されており、テナガエビが主に近木川下流、ユビナガスジエビ、スジエビモドキが近木川河口など、アシナガスジエビが二色浜の離岸堤などで見つかっています。



ヒラテテナガエビ

(体長5 cm~8 cmの各サイズ)

貝塚市産 2013年1月28日採集

 館長コーナー

生きものだいすき

本種の形態は和名のとおり、太くて平たい長いハサミ脚（第2胸脚）を持っています。テナガエビのハサミと比べても頑丈そう、ケンカをしたらヒラテテナガエビの方に分がありそうです。腰（腹部）には、チャンピオンベルトに見えなくもない環状のラインが目立ちます。この水路では、テナガエビも確認されましたが、数量的にはヒラテテナガエビの方が優占していました。

どうして、市内の自然の川では見つからずに、この人工的な水路でのみに生息が確認されたのかは、よくわかりませんが、冬場も低水温にならないことに起因しているのかもしれませんが。泉州地方においては、男里川で採集したことがあります、九州など、より暖かい地域では、テナガエビよりもヒラテテナガエビの方が優勢しているようで、テナガエビよりもやや南に分布域の中心があると思われます。

この水路での調査は2012年10月22日と2013年1月28日に行いましたが、他にも同所的に確認した魚類、甲殻類を以下の表にまとめて記します。

中部水みらいセンター内水路 水生動物リスト

	目	科	種
魚類	カダヤシ目	カダヤシ科	グッピー
	コイ目	コイ科	コイ
	スズキ目	シクリッド科	ナイルティラピア
	ウナギ目	ウナギ科	ウナギ
甲殻類	等脚目	ミズムシ科	ミズムシ
	十脚目	テナガエビ科	テナガエビ
		ヌマエビ科	ミナミヌマエビ
		モクスガニ科	オオヒライソガニ
			モクスガニ

(山田 浩二)

『生きものだいすき』は一昨年からの市の広報に掲載する貝塚の生きもの紹介のタイトルです。ここ数年の間に犬や猫などペットが増え、遊学館のある『市民の森』で犬の散歩をしている人々をよく目にします。また、日本にはいない亀や、へびや魚を店で購入し、家で飼っている人もいます。

それらの生きものは寿命が来るまで飼い主の元で生活ができれば何も言うことは無いのですが、それぞれの都合により野原や川や池に捨てられたりしている例も多いようです。その行為が身近な自然のバランスを壊していくことを知っての行為だとしたらどうでしょう？

遊学館にも「引っ越しでどうしても飼うことができないので飼ってほしい」という依頼あります。飼えるときは引き取りますが、無理なときには他の施設を紹介したりして、できるだけ捨てないようお願いしています。

生きものと出会い、飼育することになった限りには、決して人間の都合で投げ出したりせずできる限り最後までお付き合いいただきたいものです。

さて、今回は、私個人の生きものだいすきを紹介します。

まず初めに《トンボが手にとまった！》

今年の5月。第5プールのヤゴを救出したときの話です。5月のある日「市内のプールにたくさんヤゴがいる。水替えになるとたくさんのヤゴが流されていくのを見るのは辛い」という声が聞こえてきました。

以前は遊学館はヤゴ救出作戦をしていたようです。そこで5月22日（水）、遊学館職員で救出部隊を編成し（3人）第5プールに出かけました。天気の良い日でした。プールの底の泥（？）の中に潜むヤゴを救いだし遊学館に移動させました。ほとんどのヤゴの背中には羽根が見受けられました。そして、一日たった写真です。

これは羽化してすぐ、羽が乾くまでに水に落ちたようで、すぐに拾い上げ手に載せました。しばらく様子を見てみると、どこかに飛んでいきました。この日は他にも水に落ちていたトンボがいたので手ですくい上げたり、近くの木の枝につかまらせたりしました。こうして、たくさんのトンボが羽化していきました。



タイリクアカネ（トンボ科）
2013. 5. 23 撮影

次に《我が家のアカミミガメ》
次ページの写真は今から24年ほど前に我が家に来た2匹です。

当時「家で飼う」といって子どもが購入してきました。はじめは3~4cmでした。小さな水槽に砂を入れ陸と池とを作り飼

いました。飼育用の『カメの餌』をやり続けました。年に数回鶏肉をやりますが量は少しです。水が汚れたらきれいな水に替えます。冬になり年末ごろには動きが鈍くなり、気温が氷点下近くを示すようになると動かなくなります（冬眠）。2月ごろまでじっとしていますが、この数年は暖冬のせいか、冬眠期間は短く、1月の日差しのある日はゆっくりですが動いていることがあります。体は年々大きくなり今は30cm近くまでになりました。大きくなるたびに水槽を大きくしましたがもうここまで来ると水槽では飼えないので、野菜を洗う大きな桶を水槽代わりにしています。



ミシシippiaアカミミガメ（ヌマガメ科）
2013. 6. 18 撮影

家のベランダにアカミミガメの飼育水槽を置いています。時々水替えの時に水槽から出して、運動をさせます。2匹とも隅の方や物陰に隠れようとしたりすることが多いですが、足元まで寄ってくることもあります。これだけ大きくなると動きはゆっくりです。

和名：ミシシピアカミミガメ

ヌマガメ科

小さい時にはミドリガメとも呼ばれる

最後に《カブトムシ》

昨年、遊学館に出入りされる方からカブトムシをいただきました。家で飼ってみようと思い、飼育方法などを聞き挑戦しました。メスが一匹でしたので、子孫を残すことなく亡くなりました。

今年、縁があって幼虫が3匹手に入り、再度挑戦する機会をいただきました。

昆虫マットを入れ、霧吹きで湿らせながらカブトムシが孵ることを願いました。

マットを固める度合いが緩く、穴が出来たりして、孵化するまでの部屋作りがうまくできているのか心配でしたが、いただいた幼虫の数だけ土の上に出てきたときには嬉しさと満足感が漂いました。



カブトムシ (コガネムシ科)
2013. 7. 7 撮影

(高橋 寛幸)

特別展レポート

第8回生き物切り絵展報告

期間 2013年4月21日～5月15日

場所 自然遊学館多目的室

目的 生きものを観察し、切り絵にすることでより生き物の姿を学ぶ。
その活動を展示することでより多くの方々の興味を引き出す。

参加作品

- ・ 4/14 製作会の作品
- ・ 過去の参加作品等
- ・ 指導作品

作品展の様子



ポスター



入口、挨拶など



全体掲示の様子 1



全体掲示の様子 2

感想など

- ① 作品には驚きました。みなさん何十年もやっているのですか。私もやってみたいのですが、どうすればいいのですか。できましたら先生の作品もみたいです。来年も開催してください。必ず見に来ます。
- ありがとうございます。長い人で5年くらいです。展示作品は私の指導画をコピーしています。
- ② ぼくはきれいなものが好きです。できれば分けてくれませんか。・・・また、来ますので画紙ではってメッセージを下さい。
- てんじぶつはお分けできません。5年生以上になれば作品をつくる会に参加できます。

- ③ いろいろな作品を見せて頂きすごいと思いました。また、作品展をしてほしいと思います。また、見に来たいと思います。
- ぜひお願いします。
- ④ いろいろな生きものの切り絵、また、細かいところも美しく、眼を楽しませて頂きました。今度で3回目の拝観でしたが毎回待ち遠しく思います。また、来年も楽しみにしています。
- うれしいです。来年もよろしくお願いします。
- ⑤ 本物のようにすごかった。また、来たいです。
- 本物をよく見て作っています。
- ⑥ 鳥の絵なんか細かいところまで、作っていききれいでした。見ていて落ち着きます。
- 切り絵は細かなところを大切にしています。
- ⑦ この絵はすごい!!これ紙で作っているのですか。こんなにいい絵は作れません。
- ありがとうございます。主に画用紙を切って作っています。
- ⑧ 新谷征二さんの作品、貝殻の切り絵に感動しました。
- お伝えします。
- ⑨ 3歳の息子が「僕もやってみたい」ととても興味を持っていました。切り絵に出会える機会は数少ないのでとても良い経験になりました。ありがとうございました。
- 当館の切り絵教室は小学校5年生からです。
- ⑩ ここまで上達するには何年かかられていますか。色はどんなふうに入れていらっしゃいますか。質問に次回にちょっと答えて欲しいです。体

験教室があればいいですね。

→ その日初めて参加してできた作品があります。画用紙や色画用紙を使っています。10月27日(日)に製作会をします。

- ⑩ 切り絵ですか。つーくらい、すんげーレベルの作品。この企画マジでいいです。やっぱ人もつくっているのですごいけど、その風景を作る動物や植物もすごいですよね。また、色々企画しちゃってください。見にきますよ。とんできますっ!スゲー。

奈良のTより

→ 「その風景…」すごい、素晴らしいお考えです。本当にありがとうございました。

(他にもたくさんの感想を頂きました。参考にさせて頂き次回以降に生かしてまいります。)

(川村 甚吉)

特別展「千石荘の自然」の報告 I

本誌 62 号で、千石荘の自然が貝塚市にとってどれほど貴重なものであるかを紹介しました。今回、2013年6月16日から7月14日まで開催した特別展では、千石荘にすむさまざまな動植物を具体的に紹介することによって、千石荘の自然の大切さをお伝えすることを目的としました。

千石荘と呼んでいる場所は、国立千石荘病院があった場所周辺を指し、住所で言えば、北半分が貝塚市名越、南半分が貝塚市三ツ松に当たり、北西の角が貝塚市橋本、西側に位置する大井谷池から北西に伸びる細長い農耕地が熊取町七山北にな

ります。南北約 1km、東西は最大で約 500mという範囲です。標高はだいたい 50~70mで、70mを越える箇所が数ヶ所あります。

今回の特別展で焦点を当てたグループは、植物、キノコ、昆虫、クモ、陸産貝(カタツムリ)、両生類、爬虫類、哺乳類です。ポスターもできるだけ多くのグループから写真を選びました(図1)。このうちキノコとクモを除くグループは、今年で20周年を迎える自然遊学館が市民の皆さんの協力を得て蓄積してきた記録から、貝塚市全体および千石荘のリストがかなり充実したものとなってきました。



図1. 千石荘の自然展ポスター

それぞれのグループの記録をまとめて大ざっぱに言えることは、千石荘では貝塚市全体の4分の1から3分の1の種が確認

されているということです。たった1平方kmに満たない里山にこれだけの動植物が生息していることは、林、草地、水田、畑、ため池、水路など、千石荘の環境が多様であることを反映したのですが、逆に言えば、いかに他の場所の自然が失われてきたかを示していると思います。

以前はごく当たり前だった里山の景観が、数十年のうちに、貝塚市にとって和泉葛城山と近木川河口・二色の浜に匹敵するほど希少なものになってしまったのです。私たちの例えば3世代の生活を考えてみて、劇的に便利になったことを思うと、少しは私たちから多くの動植物に「ごめんね」と言う時期に来ているのではないのでしょうか。

今回の特別展を開催した目的は、千石荘にいろいろな生きものが生息していることを、もう少し心に留めて欲しいということです。以下では、千石荘で確認された動植物の各グループについて、4回に分けて紹介していきたいと思います。

1. 千石荘の植物

南北約1kmにわたる細長い地域に、樹木が生育し、森になっています。その西側は農耕地帯、東側は千石荘病院跡地と養護学校跡地です(図2)。その森の北寄りの部分は、千石掘城址周囲のコナラやアカマツが優占する林と牛神池周辺のヤマモモ、クスノキ、ナナメノキなどの常緑樹が優占する林に分かれています。コナラやアカマツが優占する林は、かつては里山の薪炭林として利用されていたものと思われる。

南寄りの部分は樹木も大きく樹高25m

を越えるものもあり、ヤマモモ、ナナメノキ、カゴノキ、カクレミノなどの暖地性の照葉樹林の構成種を多く含んでいて、当地周辺の本래の植生を伝えるものとして貴重です。



図2. 千石荘一帯の地図

大阪府レッドデータブック(大阪府、2000)の指定種で特筆すべきものは、牛神池のアンペライ(絶滅危惧Ⅰ類、図3)で、泉南地域でこれだけ安定したアンペライの群落があるのは千石荘だけです。以前に確認されていた絶滅危惧Ⅱ類のタヌキマメと要注目のイヌタヌキモは、2012年と2013年に上久保文貴先生と行ってきた植物調査では確認できませんでした。代わりに2012年の調査では、要注目のギンランが確認されました。



図 3. アンペライ

植物で展示した写真は、アケビ、アンペライ、エノキ、カクレミノ、カゴノキ、ギンラン、クヌギ、クロバイ、コ克蘭、コナラ (図 4)、タシロラン、トチノキ、ナナメノキ (図 5)、ナリヒラダケ、ヒメユズリハ、マダケ、ヤマモモです (以上、五十音順、外来種を除く)。



図 4. コナラ



図 5. ナナメノキの樹幹

自然遊学館の調査では、貝塚市内でこれまでに 1,120 種 (153 科) の植物が確認されていて、そのうちの約 3 分の 1 に当たる 381 種 (103 科) が千石荘で確認されています。植物でも以下のグループでもそうですが、種数は暫定的なもので、自然遊学館の 10 周年記念に発行した植物リスト (上久保ほか、2003) に、2009 年の和泉葛城山 (上久保ほか、2011)、2010 年の市民の森周辺 (湯浅、2012)、および、上久保先生と千石荘で 2012 年と 2013 年に調査した結果をまとめた値です。これから調査が進めば種数はもっと増えると思います。

2003 年発行の貝塚市の植物リストになかった外来種で、現在、千石荘に分布している種は、アメリカオニアザミ、オオブタクサ、ナルトサワギクなど 10 種以上にのぼります。これら外来種については、次号以降で扱うことにします。

2. 千石荘のキノコ

担子菌類 13 科 34 種、子囊菌類 3 科 3 種、合計 16 科 37 種のキノコ (菌類) 確認されています。担子菌と子囊菌の違いは胞子のできる部位で、簡単に言えば、担子菌が (担

子器の) 外側、子嚢菌が(子嚢の) 内側ということになります。

担子菌類では、ヒラタケ、ムラサキシメジ、キクラゲなどの美味しいと言われるキノコもあれば、クロタマゴテングタケやニセクロハツという猛毒のキノコも確認されています。

子嚢菌類では、オオゴムタケ(図6)という「食べられそうにないけど食べられる」キノコが確認されています。以上のキノコは腐植土や朽木などの植物遺体から生えるものですが、子嚢菌類のガヤドリナガミツブタケは冬虫夏草の一種で、ガの成虫に寄生するものです。



図6. オオゴムタケ

2013年6月現在、貝塚市全体で自然遊学館が確認したキノコは、47科153種となっていて、千石荘の種数は約4分の1に相当します。ただし、キノコ類は、クモ類とならんで、自然遊学館の記録が貧弱なグループで、調査が進めば、種数はさらに増えると思います。

謝辞

植物に関する文章は、元自然遊学館長の上久保

文貴先生が自然遊学館創館10周年記念号に書かれたものを参考にしました。2012年と2013年に上久保先生と千石荘で行った植物調査および樹高調査の結果の一部も、本特別展で紹介させていただきました。

引用文献

上久保文貴・白木江都子・湯浅幸子(2003) 貝塚市の植物。「貝塚の自然—貝塚市立自然遊学館創館10周年記念号—」、pp. 216-303.

上久保文貴・湯浅幸子・岩崎拓(2011) 和泉葛城山植物調査(2009年). 貝塚の自然第13号: 59-87.

湯浅幸子(2012) 自然遊学館周辺の植物の展示. 貝塚の自然第14号: 122-127.

(岩崎 拓・湯浅 幸子)

寄贈標本

<鳥類>

◆常道武士・暢子さんより

カワラヒワ 巣1点

貝塚市二色の浜 2013年4月7日採集

◆食野俊男さんより

カケス 羽根1点

和泉葛城山山頂 2013年4月22日採集

◆石間由愛さんより

ムクドリ 卵殻1点

貝塚市三ツ松 2013年5月26日採集

◆辻優士さんより

ヒヨドリ 卵殻1点

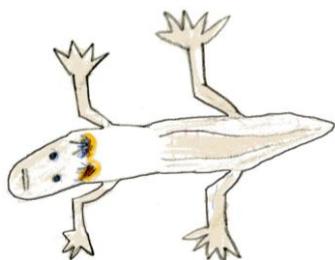
貝塚市二色 2013年6月12日採集

<爬虫類>

- ◆本田啓達さんより
ヤモリ 生体1点
貝塚市脇浜 2013年4月27日採集

<両生類>

- ◆高山みおさんより
アホロートル (ウーパールーパー)
生体1点
2011年夏に購入し、自宅で飼育



アホロートル
画：高山みお (二色小3年生)

- ◆久保元嗣さんから
シュレーゲルアオガエル 生体1点
貝塚市木積 2013年5月24日採集

<魚類>

- ◆千地芳樹さんより
ホウボウ 生体1点
忠岡町新浜 2013年6月8日採集



ホウボウ (全長約7cm)

- トミヨ 生体1点
釣り餌用生きエビに混入
2013年6月30日、貝塚市内で購入

- ◆吉間陽哉さんより
ヒイラギ 生体1点
貝塚市近木川河口突堤
2013年6月30日採集

<甲殻類>

- ◆鈴子佐幸さんより
ヒシガニ 生体1点
トゲトゲツノヤドカリ 生体1点
岡山県倉敷市 2013年4月28日採集
- ◆岡村親一郎さんより (漁師から譲渡)
シャコ 生体1点 (コフジガイ付着)
大阪湾泉南沖 2013年5月16日採集
シャコ 生体2点 (コフジガイ付着)
大阪湾泉南沖 2013年6月7日採集
トゲシャコ 生体1点 (コフジガイ付着)
大阪湾箱作沖 2013年6月8日採集

<環形動物>

- ◆鈴子佐幸さんより
ミナミエラコ 生体1点
岡山県倉敷市 2013年4月28日採集

<軟体動物>

- ◆濱谷巖さんより
カセミミズ 1点
和歌山県古座町沖
1962年12月17日採集
- ◆岡村親一郎さんより
ヤヨイハルカゼなど多数
産地・採集日とも不明

- ◆秋武仁志さんより
クチベニマイマイ 殻1点
貝塚市千石荘 2013年4月20日採集
- ◆鈴子佐幸さんより
イイダコ 生体1点
岡山県倉敷市 2013年4月28日採集

<昆虫>

- ◆常道武士さんより
コクワガタ 成虫1点
貝塚市沢 2012年8月採集
- ◆江本大地さんより
トックリバチ 巣3点
貝塚市二色 2013年4月13日採集
- ◆辻優士・渡邊悠斗・石野雄大さんより
クロヤマアリ 蛹3点・成虫3点
貝塚市二色 2013年5月27日採集
- ◆林太幹・渡邊絢士・阪口晃一朗さんより
ウンモンズズメ 成虫1点
貝塚市二色 2013年6月2日採集
- ◆福田哲郎さんより
ヒラズゲンセイ 成虫1点
堺市原田 2013年6月3日採集
- ◆辻優士さんより
コガネムシ 成虫1点
貝塚市二色 2013年6月14日採集
- ◆食野俊男さんより
フタホシオオノミハムシ 成虫1点
和泉葛城山 2013年6月25日採集
- ◆自然遊学館わくわくクラブより
ウンモンミドリカスミカメ 成虫1点
クチナガチョッキリ 成虫1点
チクシトゲアリ 成虫1点
岸和田市河合町 2013年6月27日採集

<寄贈写真>

- ◆秋武仁志さんより
シロハラ 1枚
貝塚市柳池 2013年4月5日撮影
シロハラ 1枚
貝塚市柳池 2013年4月6日撮影
カワラヒワ 1枚
貝塚市永寿池 2013年4月11日撮影
アナグマ 5枚(+動画1)
阪南市鳥取池 2013年5月2日撮影



アナグマ

阪南市鳥取池 2013年5月2日
秋武仁志さん撮影

- 紀泉高原自然休養林 8枚
阪南市周辺 2013年5月5日撮影
ハマシギ 3枚
キョウジョシギ 1枚
近木川河口 2013年5月15日撮影
カワトンボ(橙色型) 1枚
貝塚市蕎原 2013年5月18日撮影
- ◆食野俊男さんより
アオジ 1枚
貝塚市千石荘 2008年3月17日撮影
カシラダカ 1枚
貝塚市千石荘 2008年12月3日撮影
コガモ 2枚
貝塚市千石荘 2008年12月16日撮影

ノスリ 2枚
ノスリとハシボソガラス 2枚
ルリビタキ 1枚
貝塚市千石荘 2008年12月20日



ノスリ
貝塚市千石荘 2008年12月20日
食野俊男さん撮影

ツグミ 1枚
貝塚市千石荘 2009年1月25日撮影
イカル 1枚
貝塚市千石荘 2009年3月21日撮影
コゲラ 2枚
貝塚市千石荘 2009年5月2日撮影



コゲラ (子育て中)
貝塚市千石荘 2009年5月2日
食野俊男さん撮影

モモブトカミキリモドキ 1枚
モンキチョウ 1枚

貝塚市千石荘 2013年4月25日撮影
ツマキチョウ 2枚
ヤブキリ幼虫 1枚
貝塚市千石荘 2013年4月27日撮影
クロコノマチョウ 1枚
ベニシジミ 1枚
貝塚市千石荘 2013年4月29日撮影
セグロアシナガバチ 1枚
貝塚市千石荘 2013年5月1日撮影
アケビ花 1枚
オオアブラギリ花 1枚
ヤブキリ幼虫 1枚
ナミテントウ 1枚
ナナホシテントウ 2枚(うち幼虫1枚)
ナガサキアゲハ 1枚
サトキマダラヒカゲ 1枚
ツバメシジミ 2枚
貝塚市千石荘 2013年5月5日撮影
タンポポ種子 1枚
ベニカミキリ 1枚
ナミアゲハ 2枚
コムスジ 1枚
コチャバネセセリ 1枚
ツバメシジミ 2枚
ミツバチの一種 1枚
貝塚市千石荘 2013年5月6日撮影
ウグイス 1枚
コムスジ 2枚
貝塚市千石荘 2013年5月8日撮影
ハリエンジュ花 1枚
クサガメ 1枚
ヤブキリ幼虫 1枚
モモブトカミキリモドキ 1枚
ヒサマツムシヒキ 1枚
アオスジアゲハ 1枚

貝塚市千石荘 2013年5月12日撮影
オナガガモ 3枚
キアシシギ 1枚
チュウシャクシギ 5枚
貝塚市近木川河口
2013年5月13日撮影
クマバチ 4枚
貝塚市千石荘 2013年5月13日撮影

スタッフ日誌

5月20日、北小学校の生徒と第1プール(畠中)のヤゴを救い出す授業に参加しました。幼児用プールには、昨年の秋に産まれた卵から孵ったヤゴがたくさんいて、そのほとんどはタイリクアカネなどのアカトンボの仲間でした。羽化したいのにプールの壁面に登れなくて死んでしまったヤゴも少なからずいました。ほっておくとプール開き前の清掃で下水として流されてしまいます。数100匹のヤゴを救い出し、育ててもらふことにしました。無事に成虫になって飛んでいったでしょうか。(岩)

6月5日・6日、職業体験として、貝塚市立第一中学2年生3人を受け入れました。1日目は、飼育している生きものの餌替え、特別展の準備、汽水ワンド調査など、2日目は水槽そうじやトンボの池でのザリガニ駆除などを体験してもらいました。後日、感想文をいただき、しんどい仕事の中にも楽しみがあることが分かってもらえたかなと思いました。ご苦労さまでした。

(スタッフ一同)

6月19日、台湾の新竹県寶山郷より30人の訪日団が来館されました。5日間の日本滞在の間、関西の各施設を訪問する中で、当館にもお立ち寄りされた次第です。郷長さんをはじめ、役場の方を中心とした方々でした。はじめに教育研究センターの講義室で、歓迎レセプションとしてお互いに挨拶、自己紹介のあと、郷長さんから記念オブジェなどのプレゼントを頂きました。引き続き、館のスタッフから貝塚市の自然環境や生きものたちについてスライドで紹介しました。

その後、自然遊学館での展示見学をしていただき、関心のあることや疑問点について和気あいあいと質問を受けました。みなさん気さくな方たちで、ヒキガエルを手にのせては感嘆の声をあげたり、台湾産の世界最大の蛾、ヨナグニサンの標本が展示してあることに拍手がおこっていました。合わせて2時間ほどの滞在でしたが、外国からの視察ということでの当初の緊張感は、まるっきりとけ、和やかなムードでのお別れとなりました。



台湾新竹県寶山郷訪日団が展示を見学

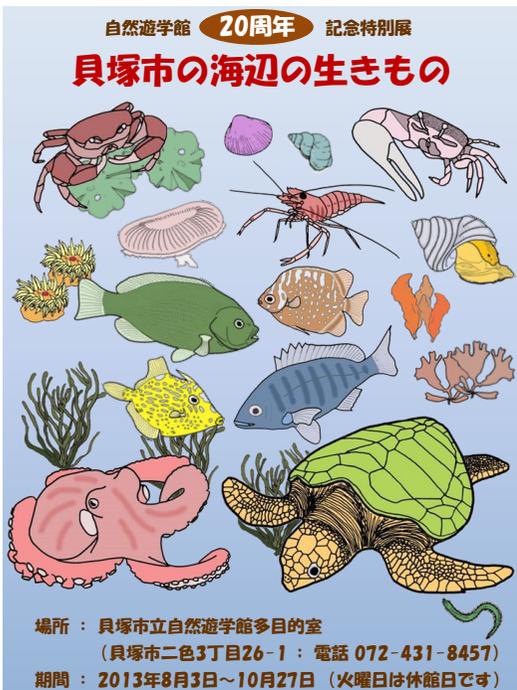
(スタッフ一同)

お知らせ

**20周年特別展
「貝塚市の海辺の生きもの」**

期間：2013年8月3日（日）
～10月27日（日）
場所：自然遊学館多目的室

この20年の間に集められた生きものの記録をもとに、標本や写真で、二色の浜や近木川河口などの貝塚市の海辺に、どのような生きものがすんでいるのかを紹介します。アサリやイトマキヒトデ、アカテガニやクロダイなどの身近な生きものから、ウモレマメガニやイセウキヤガラのような希少なものまで、さらにはアカウミガメやスナメリといった大物まで、いろいろな生きものたちが登場します。ぜひ見に来てください。



今回の特別展は、大阪湾 Years 連携企画展の一つも兼ねていて、大阪湾周辺の他の博物館でも、海辺の生きものに関する企画展が開催されています。



* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2013 夏号 (No. 68)
貝塚市立自然遊学館
〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1
Tel. 072 (431) 8457
Fax. 072 (431) 8458
E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp
http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/

発行日 2013.8.9

この小冊子は庁内印刷で作成しています。